



筑紫女学園大学リポジト

九條武子研究 — その思想の軌跡を追って —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂口, 紀美子, SAKAGUCHI, Kimiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/223

【2009年度 修士論文】

九 條 武 子 研 究

— その思想の軌跡を追って —

坂 口 紀美子

Research on Takeko Kujo: Exploring the Development of Her Thoughts

Kimiko SAKAGUCHI

はじめに

九條武子が1927（昭和2）年に発刊した歌文集『無憂華』は、「昭和の枕草子」¹と喧伝され、刊行後わずか4年間で383回も重版された一大ベストセラーである。にもかかわらず彼女の歌人としての評価は、いわゆる薄幸の麗人としての話題性が先行し「その身辺境遇に対して、一般的な同情、浪漫的な憶測も手伝って、常に才華ある名流夫人として派手に取り沙汰され」²、「作品論的な関心よりも人物論的な関心によって読まれていった」³などと論じられ、その作品自体が評価対象とされることはほとんどない。また、これまで語り継がれてきた武子像は、「最後まで実家大谷家のマスコットであり、信徒たちのアイドル」⁴として本願寺教団の権威の内に入り、「生きている修身教科書」⁵や、「主人様」「佛教」「社会」の「犠牲」となった「日本女性の典型たる夫人」⁶とされることが多い。そのため現在までに出版された伝記は、彼女が前半生において夫の帰りを待ち続けた時期に重点が置かれ、社会の抑圧のなかで苦しむ人々の救済に身を捧げた後半生と、その思想的深化にはあまり触れられていない。

しかし彼女はその後半生においてその枠から飛び出し、関東大震災を契機として積極的な罹災者救護活動を行い、その後も意欲的な社会事業を実践した。従来の武子像にあっては、その後半生に社会事業に挺身していくことになった彼女の思想の軌跡を明らかにしてこなかった。このため本願寺大谷家の出身、男爵夫人としての地位に目を奪われ、彼女の事績や思想性に正当な評価がなされてこなかったと言えるのではないだろうか。

本稿では、九條武子が本願寺のある京都から東京に移り住んだ1920（大正9）年以降を彼女の

後半生と定め、武子が社会事業に挺身した軌跡とその思想的深化を見つめるとともに、彼女の評価に対して新たな視点を提供することを目的とする。

1. 武子の前半生

九條武子は1887（明治20）年、浄土真宗本願寺派第21代法主大谷光尊（明如）の二女として京都に生まれた。京都西本願寺の奥の棟で育った武子は、「末の子であつた爲、父は厳格な中にも破格に私を可愛がつた」⁷と自認する通り、父光尊から格別の寵愛を受け、「お西のお姫さま」として成長した。

満10歳の夏まで兄の大谷尊由、大谷光明と共に師範学校附属小学校に通うが、「お姫さまは學校へなぞ成らしやらずともよいので御座います。學校は内で勉強の出来ない子が皆まゐります處です」⁸と説得され、以降は寺内で教育を受けた。当時、女子の初等教育就学率は90%近くまで達していたものの、中等・高等教育に進む者は少なく、また同年、長兄の大谷光瑞と結婚した籌子への「裏方教育」の随伴者に選ばれたためだろう、寺内教育は、後に中央公論社の社長となる麻田駒之介から教養を、安国淡雲や赤松連城らから真宗教学を対面式で学ぶほか、琴、茶道、フランス語の修得など恵まれた環境で行われた。だが武子は後に、兄達と同等に學校へ通えなかった不満を次のように吐露している。

今の第一女學校のあるところに小学校がございました、兄達と三人でいつもまゐって居りましたが、こゝが卒りますと適当な學校がありません、東京の華族女學校までも出かける必要は女にはないといふやうなことで、末子のことでもありますし内ばかりで……。⁹

1903（明治36）年に光尊が死去すると、武子は、法主を継職した兄光瑞とその夫人籌子と行動をとるようになった。光瑞は、翌年に勃発した日露戦争を国家存亡の危機と捉え、積極的な戦争支援活動を展開した。特に出征兵士の慰問と遺家族の支援に重点を置き、その推進のために籌子夫人を先頭に押し立てて各地に「仏教婦人会」の設立を奨励。武子も、籌子に伴って精力的に地方を回り、婦人会の結成を呼び掛けた。武子は、光瑞の時代になり本願寺の古い体質が大きく変化したことを以下のように振り返っている。

父が生きてをります頃には、百華園の奥まつた私たちの所は絶対に男子禁制で、それは厳しい生活をして居たものでした。けれども（中略）若い兄が中心の時代となつて私たちの周囲も一変してしまひました。兄はその気性から今までの因襲に類した古めかしい事は片つ端しから廃してしまひ今まで女のみだつた召使たちは反対に男ばかりと云つたやうな変り方で、私はその時箱の蓋がはねのけられたやうな明るい自由さを感じました。¹⁰

また、婦人会の活動を推進していくことで、新たな時代を切り開くことが出来るという高揚感を次のように語っている。

年變つて日露の戦役がはじまつた。耳にきく話、目に見るもの、すべてが變つて來て、何も知らなかつた人形の夢はさめた。若い力の目まぐるしい活動が始まつて、私の天地は夜

が晝になるそれよりも、もつと激しく展開したのである。活き活きた光と自由は投げられて、錦華殿に人足繁く電話の鈴は鳴りつゞける。兄は國家のため法門のため、王法の奉仕に盡瘁し、姉は自ら思い立つて佛教婦人會のために活動したのも其頃であつた。¹¹

宗祖親鸞の血を引く武子による地方巡教は各地で非常な歓迎をもって受け入れられ、会員数は飛躍的に増加した。同時に、封建的な社会風習と家父長制度の下に置かれていた女性たちの国家・教団・社会への参画意欲が高揚し、それは日露戦争後も衰えることはなかった。戦後、婦人会の事業は戦争協力から慈善及び教育へ移り、宗門女子大学設立運動へと発展していった。¹²

1909（明治42）年、武子は籌子の実弟でもある九條良致と結婚。ほどなく夫の留学に同伴して渡欧し、同じく光瑞と共に海外視察中であつた籌子と、英国ロンドンのスラム街をはじめ官・民・宗教の手による女学校や孤児院、病院などを見て回つた。二人は、現地で「大学を卒業されし英国婦人」と出会い、英国女性の豊かな教養と学識に驚嘆している。¹³さらにキリスト教が欧州で教育や慈善を通して社会の課題に向き合っている事を知り、大いに刺激を受けたものと推察される。帰国後、本格的に女子大学の設立運動を始め、急逝した籌子の遺志を継いで実質的な運営責任者となつた武子は1912（明治45）年、「女子大學設立趣旨書」¹⁴を発表した。

その趣旨書には、「我國家の進歩を資け我宗運の發展を期するに其最も急務なるは、寔に女子教育」であり、「畢竟我佛教者が國家の進運に貢献すべき一大任務」と記され、女子大学の設立が国家と教団の發展に貢献するものであると強調されていた。しかし、女子大学の設立によって、日本女性の置かれた地位をどのように改善させるのか、具体的なことについては言及されていない。また当時、女子の就学率は、初等教育においては90%を越えていたが、中等教育に進む者は10%に満たなかつた。その状況を鑑みれば、仏教婦人會が日本女性の教育に向き合おうとした場合、「女子大學」という高等教育よりそれ以前の教育に注目することが自然であつたと思われる。にもかかわらず、なぜ一足飛びに女子大学の設立を掲げたのか。趣旨書の一節からその理由を読み取ることができる。

外教徒亦茲に見る所あり、往年東都に女子大學を經營し、昨秋復た西京に同志社女子大學を發表す、尚ほ聞く所に依れば更に京阪の中間に地をトシ大規模の女子大學を創設するの議ありと顧ふに女子教育の事業、豈に獨り異教徒に一任し、袖手傍觀して可ならんや¹⁵

当時の仏教界は、内地雑居に伴うキリスト教の教勢拡大などに対抗するため、仏教の存在意義を社会に示す手段として、教育や慈善活動を捉えていた。武子も、女子高等教育の必要性やその理念などは曖昧なまま、本願寺の「お姫さま」の期待を担い、キリスト教の社会的進出に危機感を抱いてこの事業を推進しようとしたものと考えられる。

武子は約30万人の婦人會会員の陣頭に立ち、国内のみならず外地にまで奔走して女子大学設立資金の勧募を行なつた。寄付の申し込みは続々と寄せられ、計画は順調に進むかに見えたが、ほどなく発覚した本願寺の借金問題に連動して光瑞が法主を引退すると、籌子、光瑞と立て続けに指導者を失つた婦人會は、負債償還を最優先とする教団から支援を得られず、寄付金の回収が滞つたことなどにより、女子大学設立計画は大きく後退していった。その際、武子は婦人會連合本部

事務機能の要であった弓波瑞明主事の転出を涙ながらに反対したり、¹⁶後に本願寺執行長を務めた後藤環爾へ「女子大学をお建てにならぬと幽霊になつて化けて出ます」と女幽霊の絵を描いて手紙を送るなど、¹⁷なりふり構わず協力の要請をしている。しかしながら、当時の宗務情勢ではそれ以上の進展は望めず、女子大学設立の計画は、武子や婦人会の手からも離れていった。

その後、借金償還のめどがたった教団は1919（大正8）年、キリスト教主義の女子大学が相次いで設立されたことへの対抗心と教団の体面保持のため、突然教団の事業として女子大学の設立を決定した。結局、教団による女子大学設置申請は文部省の認可には至らず、京都女子高等専門学校として開校した1920年、武子は突如10年ぶりに帰国した夫に伴い、東京へ居を移した。当時、武子は以下の短歌を詠んでいる

あなおろか 嬉しきことを うれしとも 悲しきことを かなしとも思はず¹⁸

鍵もつは 汝男ぞ 閉ぢこめて いたはり顔も をかしからすや¹⁹

自らの本願寺の権威に依存したあり方に疑問を持ち得なかったとはいえ、教団の都合に翻弄された武子は、大きな徒労と挫折感、鬱積を抱えつつ東京へ転居したに違いない。

2. 東京移住と慈善活動の機縁

1920（大正9）年12月、東京築地本願寺内に移り住んだ九條武子は、新聞取材に「兎に角向後はその方面のことより家庭の主婦として働かねばならぬ境遇になりました。婦人会の事も当分は関係はできますまい」²⁰と応じ、仏教婦人会連合本部長としての地方巡教を減らし寺内にこもる日々を始めた。教団勢力に依拠した女子大学設立運動に挫折した武子は、家庭人としてもう一度、自分を見つめ直す時間を持つとしたのかもしれない。

そのころ東京には本願寺派管長事務取扱を務める兄、大谷尊由がいた。尊由は「真宗文書伝道会」総裁として、同会発行の冊子を街頭で販売配布する路傍宣伝活動を指揮しており、その活動は『読売新聞』で取り上げられるなど世間の注目を集め始めていた。²¹1918年に発生した米騒動を発端に資本主義社会の諸矛盾が顕在化し、社会不安が一挙に高まっていたが、その傾向は特に都市部・東京で顕著なものがあつた。こうしたなかで、尊由は東京に真宗布教の拠点を築こうとしており、教団慈善・社会事業はそのための重要な要素の一つであつた。

尊由は、夫に従い東京へ転居した武子の動向に世間の関心が集まるなか、武子を自己の進める事業の協力者として位置づけることに利点を感じたものと考えられる。また家庭内に引きこもろうとする妹を心配した側面もあつたのかもしれない。武子に「女中子守学校」の創設を薦めており、²²真宗文書伝道会の活動への積極的な参加も要請したようである。

1922（大正11）年11月5日、武子は伝道会の一環で深川地区に連なる「トンネル長屋」を訪問した。『読売新聞』は事前に「(武子が) 細民の子女を慰問し戸毎に餅と小冊子とを與へ」る、と告知。²³当日の武子の様子を、『社会事業』では以下のように報じている。

九條武子夫人は午前十時から、銘仙矢絰の質素な服装で本多、國東両氏外に侍女二名と

諸共、深川貧民窟慰問に出掛けられた。夫人は手拭や菓子袋や宗旨の書いてある小冊子など抱へて、電車で菊川橋迄行き、扇町警察署長の案内で、善隣館に寄り集つてみた兒童に手づから菓子を與へたり、猿江町のトンネル長屋を軒並に訪問して、手拭を配つたり、富川町の貧民托兒所では、親に置き去られた頑是ない乳飲兒に、持參の菓子を含ませたりして、最後に同町の棟割長屋を一巡し、小冊子を配布して正午引げた。²⁴

この活動に対し、『中外日報』の記者藤井草宣は、武子が「誇れる貴族面」で「貧民窟の子供らをワキ役」に「名声を得る」ため「お芝居」をしたと痛烈に批判した。

あんたのこの舊式な生意気な慈善行為に腹が立つたのだ。武子さん、いまどきに、さうした貴族振り——それは貴族であり、身分の上であるといふことを、普通より以上に痛切に意識すべく、その極端に反對する周囲に自己を立てて、そこに發見されたる對照上の自分の優越感を（中略）味ふといふこと、その無意識的な暴虐なる態度、おゝ武子さん、（中略）天下のやんやといふ評判とりを豫想してこの芝居をおやりですね。²⁵

藤井はさらに、警察官を従えわずかな物品を配った行動が「親鸞の眞劍な無産者生活やその鋭き自己批判的精神とまるで食ひ違ひはしないとあなたは断言する事が出来ますか。」と問うた。これに対して、武子はこの慰問で何を感じたのだろうか。以下は、武子が慰問直後に友人に宛てた書簡の一節である。

あの細民窟にまゐりました。とてもとても、私の思ひもつかぬ敗殘の人達でした。貧ゆゑに、その人達はひがみきつてをります。その日ぐらしとはよく申すことながら、あのドン底の人達は、もつともつと時間に迫られた、いはゞ刹那暮しと申すのでせうか。日本でも、外國でも、人類の住んでをる世界ならば、どこにも貧富強弱のへだゝりはのがれられぬもの。いくら何々主義だのともうしたとて、理想は現実にまだ中々遠いので、それを無理にしようとしたつて、只乱をかもすばかりで御座いませう。²⁶

この書簡では、「貧富強弱のへだゝりはのがれられぬもの」、「無理にしようとしたつて、只乱をかもすばかり」と理解され、貧困の現実が肯定されている。そして貧困者を「貧ゆゑに」「ひがみきつて」いる「ドン底の人達」と見なし、「與へ」る側の自分との間に一線を画する傾向も見受けられる。ここから、当時の武子が「貧民への惰民觀、天皇の愚赤子觀の上に立った、恩恵、恩典としての仁慈という基本的性格を有する」²⁷体制的な慈恵思想の域を超える視点を有していなかったことを読み取ることができるだろう。また武子は、この日を主題に、以下の短歌を詠んでいる。

二畳敷 九人のひとの居ならびて 足だにもやすく のぶるすべなし

老い老いて やせさらぼひて 一人ゐを めぐる障子の 紙もあらなく²⁸

初めて「細民窟」を訪れその厳しい現状を知った武子だが、連れてこられた驚きの範疇を超えてはいない。つまり、この時期の武子の活動は、兄尊由から誘われた教団慈善・社会事業の応援に「出掛け」たに過ぎず、主体的に慈善・社会事業に関わっていく意識は希薄であったといえるだろう。²⁹

3. 関東大震災罹災と本願寺との救護活動

真宗文書伝道会の一環で「細民窟」の現状に触れた翌1923（大正12）年9月1日、九條武子は関東大震災に遭遇した。関東全域を襲った強震は、発生が昼食準備時間帯だったことに加え台風の影響で強風が吹いていたことから火災被害が拡大し、死者・行方不明者約10万5,000人、約42万3,000棟の住居が全半壊や焼失するという甚大な被害をもたらした。³⁰

武子は、居住する築地本願寺で揺れに遭い、間断なく続く余震と激しい業火のなか、二度ならず三度までも死を覚悟しながら青山の兄、大谷光明宅へ避難した様子を次のように記している。

逃げ出しましたが、もう火は歌舞伎座のあたりまで進み、さかんに火の粉が飛びちり、非常な風で、顔には、砂だかほこりだか、いたいものがあたりますの。(中略)農商務省の火を見て、もう助からないものと、今度は濱離宮へとまた逃げましたが、これで、芝方面に火があつたら、もう死ななければならぬものと、覚悟しました。³¹

また友人宛ての書簡に「三十五年間の物質は、全部焼きつくしましたから、これからは甦生のつもりで、私もよつほど心を入れかへねばならぬと思うてをります。」³²と綴り、震災での体験を機縁として物質に対する執着を離れ、新たな生き方を求めていく決意を吐露している。それは同時に、本願寺法主の娘や妹として、教団の社会的勢力に依拠してきた前半生との決別の第一歩を画するものであったともいえるだろう。

以下は、武子が震災を詠んだ歌である。

くつれおつるもの、おと人の叫ぶ声 かなし大地は ゆれゆれてやます
母の如 たのむ大地の 叛逆に なす術もなし 人の子あはれ
わかちから みなきりおほゆ 創造の 民のひとりと われをよろこぶ³³
人も我も 阿鼻叫喚の 地獄界 たゞに譬喩と 思ひてありき³⁴

これらの歌には、人間が普段大丈夫とすがっているものの危うさが表現されている。震災は、われわれの生存の大前提であるはずの「大地」さえもが揺るぎないものでないことを知らしめた。この世は火宅無常の世界と聴かされ了解してきた武子だが、実際に「阿鼻叫喚の地獄」から自ら半死半生で逃れ出た時、この世のなかには、常なるものや不変なるものは、何一つとして存在しないことを実感したのではなかったか。「三十五年間の物質」の喪失は、「私」のものと握りしめてきたものは何一つないことを気付かせた。

さらに武子は、震災から24日後、いまだ兄宅に厄介になっている自身の近況を以下のように綴っている。

私はまだ、家も定まらず、ぐづぐづいたしてをります。今までは、かうまで切實には考へてをりませんでした。今は衣食住に直面してをります。全く今度の天災が、私どもにも與へた、するどい試練の鞭で御座います。(中略)それより時候の変わり目に、さぞこまる人たちが多いことで御座いませう。³⁵

震災により、武子が生まれて初めて「衣食住に直面」した時、その胸には前年「細民窟」で出

会った「いはゞ利那暮し」の「ドン底の人達」の姿が浮かんでいたと思われる。安住していた「母の如たのむ大地」が揺らぎ、武子自身の人々と同じ地平に突き落とされた時、「あはれ」な「人の子」は、彼らなのではなく自分自身であり、「人もわれも」同じく大いなる仏によって生かされ、仏に包まれた「民のひとり」だという真実に気づかされたのではないだろうか。それは武子にとって、驚きと共に心強い経験であったに違いない。震災を契機に「人もわれも」「民のひとり」という同朋性の視点を感得した武子は、罹災した身でありながら、救済活動に挺身していったと考える。

いっぽう、本願寺教団は、震災により築地本願寺本堂焼失などの被害を受けたが、前年の親鸞聖人生誕750年・立教開宗700年の際に集めた豊富な余剰資金を投じて、組織的かつ大規模な罹災者救護事業を展開した。震災直後から築地本願寺跡地に「臨時救済事務所出張所」を設置し、東京市内各所に天幕（テント）救護所を設け、ハガキの代筆や薬品・飯料の供給、遺骨預かり等など幅広い要望に応じた。

武子はこれらの事業に積極的に協力し、対策の手が遅れていた罹災児童の支援に特化した募金「罹災児童愛護袋運動」を思い立つ。³⁶ 義姉で仏教婦人会総裁の大谷絰子らと連名で「愛護袋の発起」を発表し、³⁷ 全国に3,000分会以上あった仏教婦人会へ愛護袋を配布して一口20銭の寄付を募った。

今回関東の震災になやめる幾十万のお子供達について色々お世話をし、且つ着物や学用品をと、のえてあげたいという念願から、児童愛護の運動をおこしました。何卒この趣旨を御賛同くださるべく、御喜捨下さるやうおねがひいたします³⁸

被災者としても注目されていた武子を先導役に位置付けたこの運動は、単に愛護袋の配布・回収だけではなく「愛護袋宣伝班」による街頭募金へと広がっていった。例えば京都では、宗門女子校の生徒らが街頭でタスキを掛けてメガホンを鳴らし、雑踏に潜り込んで募金を集めた結果、わずか4日間で6,000円以上を集金した。³⁹ その成果を、教団の機関誌『教海一瀾』は以下のように報じている。

同袋は一口貳拾銭のこと、なり居るも、中には生徒の活動振りに感じて五拾銭又は壹圓、五圓を投ずるもの多く、(中略) 女生徒の活動は織るが如き雑沓の間を潜りて義金の募集を試みたる爲め、寸刻にして袋の堆きを見る。⁴⁰

しかし、『中外日報』は、次のように記して、そのあり方を批判した。

あれは児童虐待だ、少女虐待だ。袖乞の真似をさせて人が断るとさも悲しそうな顔付をする、そうして驚いたのは大通りを宣傳隊らしい大人の一隊が喜々として自動車で飛ばしてゐることだ、願はくば何故少女達をそれに乗せて大人が袖乞の真似をしないのか、それが眞の児童愛護だよ⁴¹

また袋の裏面には「みなさん佛の御名によつて不幸な子供達を愛護してあげてください」と記されていた。愛護袋運動は、派手な宣伝が奏功して合計10万円以上が集まり、⁴² 迅速に児童用冬着が手配されるなど、⁴³ 罹災児童の支援に大きな成果をあげたことに疑いはない。しかし、『中外

日報』が

愛護してあげてくださいは何といふ高ぶつたもの、考へ方だらう、是ぢや全くソリダリチーの定義さへ判つて居ないぢやないか、平時のウンゾリ返り方が伺はれる⁴⁴

と指摘した通り、そのあり方は女性や子どもを動員して募金額の多さを誇り、罹災者の苦しみを共有しようとしなない「高ぶつた」ものであった。そしてそれは、武子が罹災によって得た「人もわれも」を対等・平等とみなす視点とは対極のものであったに違いない。

『中外日報』はさらに「外面的な本願寺の救護」と題し、以下のように報じた。

東京に於ける救護事業の中佛教各團體中で最も花々しく救護作業をやつてゐるのは西本願寺だといふ。(中略) 築地日比谷日暮里等の活動は多くの罹災者を喜ばしてゐるが何うもあまりに外面的のみに流れてゐる弊がある。(中略) 西本願寺の事業は花々しくはあるが永續性を有してゐない。恐らく近き將來には西本願寺の奮闘は何ものをも残すことなく終了せねばならなくならう。⁴⁵

震災後、本願寺教団は数々の社会事業の看板を立ち上げたが、その多くは数ヶ月間の期間限定として実施されていた。武子もまた、愛護袋運動のほかに縫製技術と工賃を同時に取得できる仕組みの「婦人職業輔導館」を発起、開設したが、⁴⁶利用者数の集計を数回行った後は、多くの女性が詰めかけていたにも関わらず、間もなく閉鎖されたようである。⁴⁷つまり教団が行った震災救護事業は、華々しく脚光を浴びた震災直後を中心とした臨時的、応急的なものであり、被救済者の立場に立って永続的な支援の手を差し伸べるものではなかったといえる。その後も本願寺教団は、社会問題の広がりに対応して様々な社会事業を展開していったが、それは、被救済者の視点や立場に即したのではなく、国家側の要請を受けて仏教教団の社会的存在意義を誇示しようとする傾向の強いものであった。

4. 独自の救済活動への模索

震災から1年が過ぎたころ、教団は運転資金不足や東京市からの撤退通知を理由に、テント救護所から始まった日比谷診療所の閉鎖の意向を表明した。しかし診療所には依然日に数百人の患者が押し寄せており、臨時的かつ行政側の意向を優先させる教団救護事業のあり方に疑問を感じた九條武子は、自ら相談役となって診療所の存続を決意。同診療所主事の田中もと子らに協力を求め、⁴⁸1925(大正14)年6月、本所区役所跡地に「築地本願寺診療所」を設立した。⁴⁹

続けてその年の暮れ、武子は同診療所を拠点に病貧者を戸別訪問する「年末無料巡回診療」の実施を思い立ち、後の築地本願寺副輪番、仁本正恵とともに独自の調査を行った。調査の方法や期間は明らかではないが、その結果として従来の救済事業における6つの短所を見出している。

- ①病貧者の心理に理解ないこと。
- ②慰問品の選擇に注意が足りないこと。
- ③事務的で不親切なこと。

④一ヶ所に病人を集めようとするので眞の救済を要すべき重患者は洩れること。

⑤宣傳にばかり力を入れてゐること。

⑥統計の數字を作ることのみ腐心してゐること。⁵⁰

ここに挙げられた①と②は、かつて兄尊由に連れられて「細民窟」を慰問し、用意された物品を手渡すことで満足していた武子自身の姿に重なる。そして、従来の救療事業が宣伝ばかりに力を入れ、統計作りに腐心していると指摘する⑤と⑥は、社会的影響力を保持、拡大することに主眼を置いた教団社会事業を意識したものと推察される。また③と④とは、被救済者の多様な苦悩や要望に対応しようとしなない行政の在り方への批判を含んでいるものと考えられる。

武子は、高みから被救済者を思いやるのではなく、その視点を対象者の位置に定め、眞のニーズを知るためにこの調査を行ったのだろう。これらの結果を踏まえ、武子はこの後、本願寺の權威から一定の距離を置き、抑圧された人々に視点を定めた独自の社会事業を目指していった。

このころ、武子が知人へ寄付を請うた書簡が残されている。

私のほんのほんの小さな仕事で御座いますけれども、助けていただけなくて御座いますか。

(中略) 本願寺には厄介にはならず、やれるだけやり度いと思つてをります。⁵¹

ここにかつて教団の社会的勢力に依存し、教団関係者が準備や環境を整えてくれることを期待していた武子の姿はない。武子は自筆の短冊や色紙を売り、雑誌の原稿料金を出版社と直接交渉するなど、⁵² 自らの手で事業資金を集め、生前三度にわたり巡回診療を主催実施した。⁵³

その巡回診療は、東京を通じ屈指の細民地区とされた三河島や深川・猿江地区などに臨時の施療所を設け、無料にて診察、施薬と重症患者への往診を行ったものであった。医学に素人の武子も、医師らに伴い、白衣姿で家々を訪問した。三河島在住の堀井源之助は、武子の巡回の様子を以下のように回想している。

九條様は寒中にも拘らず、白いエプロン風の豫防衣を着られ、両腕を肘まで露はに出され、襟巻一つもされない甲斐々々しい姿で息のつまる様なむさ苦しい家へ入つて行かれます。そして破れ道具やごみごみしたもので狭められた穢い座敷に上つて端座され、叮嚀にその家族の數とか家計の状態、この町へ來つた徑路などを聞かれます。そしてその家の事情で或はお金を恵み、品物をおやりになつて慰安の言葉をかけておやりになります。又子供が青鼻を垂らしてゐればそれを自分の塵紙で拭ひとつつておやりになり、帯がだらしなくて着物がゆがんでゐれば、それを締め直しておやりになります。⁵⁴

この手記から、武子は、窮迫した生活のなか精神的なよりどころを失い「自分の生きてゐることさへ呪はしいと考へる程困つて居る人々」⁵⁵へ、事務的に慰問品を渡すのではなく、また一方的に「思想善導」するものでもなく、まず相手を知るために話を聞き、それから声を掛けていたことがわかる。

また武子は周囲に対し、常に「不請の友たれ」と語っていたという。⁵⁶ 「不請の友」とは、衆生から請われなくとも、進んで教化し救済する仏そのものを指す。たとえ心底同情し、武子が何度足を運んでも、本人の辛さや苦しみは想像することしか出来ない。そのことを十分に承知して

いた武子は、しかし頼まなくても大慈悲の心を持って人々のもとへあられ、寄り添い、常に「必ず救うから私に任せよ」と励ましてくれる仏がいることを、人々に伝えたかったのではないか。一見、孤独の淵にしようとも、誰もが大きいなる仏の力のなかについて決して一人ではない。医療行為の出来ない武子が、医師らと共に細い路地を進んだのは、本当は誰も孤独ではない心強さを伝えたかったのだと考える。

そんな武子の事業を、『中外日報』は以下のように取り上げ、賞賛した。

特に九條武子氏の如きは、毎日診療が終る迄（夜の十一、二時）どうみても餘り美しくはない腫物だらけの子供の患者に着物をきせてやつたり足袋をはかせたり泣く兒をなだめたり老人達をなぐさめたり、全く以て救済運動と武子氏とは一つのものであるやうな自然な愛のみちた活躍ぶりである、（中略）貧患者達に親愛の限りをつくして世話をしてゐる美しい奥さんが九條武子さんだと患者達はしらない。⁵⁷

これまで、本願寺が行う社会事業のあり方を批判してきた同紙だったが、「本願寺のお姫さま」として上から救ってやろうという関係ではなく、本願寺の社会的勢力に乗じた活動でもなく、一個人として悩みつつ、被救済者の視点に降りてゆこうとする武子の姿勢を賛辞したのだと考える。

おわりに

本稿では、九條武子の後半生を中心に、慈善活動との出会いから教団慈善・社会事業の広告塔の役割を担った時期、そして武子独自の活動を模索した三時期に分けて、その思想の軌跡を追ってきた。本願寺大谷家の出身や、「憂愁の麗人」という話題性により常に世間の注目を集めた武子は、その価値を知る本願寺教団に利用、翻弄され続けたが、関東大震災罹災によって本願寺の権威に依存するあり方から大きく変わっていった。それは救済者と被救済者を分け隔てることのない、如来の世界へ見開く変化であったと考える。

しかし武子の活動は、必ずしも常に被救済者から素直に受け入れられた訳ではなかった。武子が何を質問しても返事をせず、「寧ろうるさいと云った風に、黙つたまゝ相手にしてくれず、白眼以て歴然と反抗の色を示」⁵⁸した人々も少なくなく、相手の立場に立ち苦しみを共有することの難しさは、並大抵ではなかったはずである。そのような困難な状況でも、武子の活動が被救済者の心を動かし、その人間変革に至らしめたエピソードが残されている。当時の築地本願寺輪番、本多恵隆の述懐によると、武子が品物を渡す際、感謝の心持ちで喜捨しようと思えばいつでも取り次ぎをする旨を伝えていたところ、ある年末には150円以上の賽銭が集まったという。⁵⁹武子と触れ合うことによって、施される側にいた人々が施す側に転換していったのである。

武子は1928（昭和3）年2月、年末診療での無理がもとで敗血症を病み、志なかば満40歳の若さで帰らぬ人となった。しかし、晩年の活動を通じて示し続けた、同朋性の視点を持つ救済の願いは、救済者と被救済者の垣根を超えて着実に社会へ広がりつつあったといえるだろう。

＜付記＞ 本稿を書きすすめている最中、東日本大震災が発生した。いまだ被害の全容も判明しない大災害にただ胸を痛めるばかりであるが、救護の現場では、子どもを抱えた母親も、震災前から野宿をしていた人も、炊き出しを担うボランティアもみんな同じ公園のベンチに座り食事をする光景があるという。そして救護や被災地の復興に対し、被災者自身がその一定の役割を担いたいと強く願っていると聞く。武子が示した真の救済は、今回の震災救護にも、またますます混迷する日本社会のなかにおいても一つの光明を見出すものであると考える。

なお末筆ながら、大学院指導教員の中川正法先生には拙い研究を辛抱強くご指導いただき、中西直樹先生には貴重な資料の供与とともに武子への多角的な視座をご教示いただいた。この場を借りて心より御礼申し上げたい。

参考資料

- 1 高島米峰「清少納言と九條武子夫人」(1927年8月3日付『読売新聞』)。
- 2 斎藤史「九條武子短歌鑑賞」(『現代短歌鑑賞第三巻』30頁、第二書房、1951年)。
- 3 三枝昂之「往時の人気作家たち」(『短歌研究』45巻2号66頁、短歌研究社、1988年)。
- 4 尾崎礎瑛子「近代短歌女性史7－白蓮と武子」(『短歌』10巻1号131頁、1963年)。
- 5 清永孝「良妻賢母とは何か－成立の背景としての近代」(『歴史読本』51巻8号66頁、2006年)。
- 6 水月哲英「九條武子夫人を追憶の人々(二)犠牲の御生涯でした」(1930年2月6日付『九州日報』)。
- 7 九條武子「父に別れるまで」(『無憂華』160頁、實業之日本社、1927年)。
- 8 前掲『無憂華』163頁。
- 9 「白書院物語－九條武子の方を訪ふ」(1916年7月5日付『中外日報』)。
- 10 「今の若い人達」(1927年10月10日付『読売新聞』)。
- 11 前掲『無憂華』172頁。
- 12 武子の前半期と本願寺の女子大学設立計画については、中西直樹『日本近代の仏教女子教育』(法蔵館、2000年)を参考にした。
- 13 武子がロンドンより投函した手紙には、視察は「親しく相成りし」た「大学を卒業されし英国婦人」に案内を頼んだもので、「こちらの婦人は見聞もひろく、話(なにげなき)も世界的にて交際は申すまでもなく上手に御座候」と綴られている。(九條武子「英京倫敦より」『復刻版女子文壇』第7回配本14～15頁、不二出版、2004年)。
- 14 「女子大學設立趣旨書」(1912年3月31日付『中外日報』)。
- 15 前掲「女子大學設立趣旨書」。
- 16 弓波瑞明「九ヶ年間奉仕して」(『残照』62頁、仏教婦人会連合本部、1928年)。
- 17 岡部宗城「御逸話」(『婦人』第34巻3月号23頁、1928年)。
- 18 『心の花』(1921年1月号)、後に籠谷真智子『九條武子－その生涯とあしあと－』292頁(同朋社、1988年)にも所収。

- 19 『女性』(1923年1月1日)、後に前掲『九條武子—その生涯とあしあと—』302頁にも所収。
- 20 「晴れやかな九條武子夫人」(1920年12月14日付『読売新聞』)。
- 21 「本願寺の文書伝道会」(1919年11月10日付)、「大谷尊由師が指揮して少女の傳道」(1920年5月22日付)、「真宗碩学の路傍傳道」(1921年5月22日付)など、『読売新聞』は第一回目の活動からほぼ毎回取り上げている。
- 22 「九條武子夫人の女中子守學校設立計畫」(『社会事業』6巻8号、1922年11月)。
- 23 「九條武子夫人がトンネル長屋の細民窟を訪問」(1922年11月3日付『読売新聞』)。
- 24 「九條武子夫人の貧民窟慰問」(『社会事業』6巻9号、1922年12月)。
- 25 「古臭い慈善あそびをした九條武子さんに注告する」(1922年11月8日付『中外日報』)。
- 26 1922年11月7日付書簡「敗殘の人たち」(佐佐木信綱編『九條武子夫人書簡集』266~267頁、實業之日本社、1929年)。
- 27 高石史人「赤松連城の慈善観」(『仏教福祉への視座』225頁、永田文昌堂、2005年)。
- 28 「深川富川町をとひて」(『心の花』1923年1月号)、後に前掲『九條武子—その生涯とあしあと—』301頁にも所収。
- 29 この慰問について、佐佐木信綱や籠谷真智子は、武子の社会事業の始まりと定め、打本未来は、武子が貧しい者への関心が視察という知識的レベルから現実として認識できるまで発展した時期と位置付けている。(打本未来「九條武子の関東大震災後の救護活動とその信仰」友久久雄・打本未来・高木宣秀「浄土真宗における社会活動の基礎的研究Ⅰ：歴史・現状・課題」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第46号、2007年)。
- 30 『理科年表』第84冊平成23年(自然科学研究機構国立天文台編、2010年11月)より抜粋。従来、関東大震災の死者・行方不明者は約14万4000人、全半壊・焼失住居約70万棟とされていたが、武村雅之らの研究によって修正された。
- 31 1923年9月17日付書簡「九月一日の事ども」(前掲『九條武子夫人書簡集』214頁)。
- 32 1923年9月14日付書簡「罹災後はじめての便」(前掲『九條武子夫人書簡集』210頁)。
- 33 「炎の歡呼」(『女性』4巻5号108~109頁、1923年11月)。
- 34 九條武子「震災一周年の日」(『歌集薫染』46頁、實業之日本社、1928年)。
- 35 1923年9月24日付書簡「試練の鞭」(前掲『九條武子夫人書簡集』222頁)。また1926年1月10日、『読売新聞』に以下の随想を寄稿している。衣食住に支配された「生存」のためではなく、人間の尊厳や存在価値に気付いた「生活」へと働きかけるもの。それが九條武子のたどり着いた慈善・社会事業観であったと考える。

何人も衣食住に支配された生存であり、自らの思想と一致した憧れのある生活は得難いことである。

ゆゑに世の慈善を目的とする社会事業もまた、単に衣食住に対する扶助であるならば、それは貧窮者をして、貧乏階級に自足せしめる結果とならざるを得ない。

然しながら眞の救済は生活の意義を発見せしめるに在る。自らの生活を肯定し、撫育し、向上

せしめるのは、信仰の如實なる體驗を措いて何物もない。この故に、教化の伴はない社会事業が、如何に多く簇生しても、それは結局は不具な社会生活を續けてゆくことにならう。

- 36 「佛教婦人会歴史」(『佛教婦人会年鑑』108～110頁、佛教婦人会連合本部、1932年)。なお、愛護袋運動について打本は、「寄付金呼びかけ人として九條武子や大谷絢子の名が書かれているものの、寄付金の収集先は『本派本願寺臨時救災事務所』宛となっている」ため「彼女がどの程度関わったのかの判別はつきにくい。」と述べている。(前掲「九條武子の関東大震災後の救護活動とその信仰」)。
- 37 「愛護袋の発起」(『教海一瀾』第687号、1923年)。
- 38 前掲「愛護袋の発起」。
- 39 「愛護袋さまざま」など、1923年9月26～29日付『中外日報』を参照。
- 40 「愛護袋宣伝班」(『教海一瀾』第687号17～18頁)。
- 41 「東西南北」(1923年9月27日付『中外日報』)。
- 42 「震災後の築地と浅草(二)本願寺の現勢」(1924年9月7日付『中外日報』)。
- 43 「罹災兒童の暖かいお仕着せ」(『婦人』第19巻12号77～78頁、1923年)によると、婦人会連合本部は9月下旬に1万反の反物を買入れ、各地の婦人会や慈善教会、女学校の協力を得て2万134枚の児童用衣服を縫製。ネル襦袢や足袋などと共に罹災地へ発送したという。
- 44 前掲「東西南北」。ソリダリティーとは、solidarityのこと。
- 45 「外面的な本願寺の救護」(1923年10月2日付『中外日報』)。
- 46 「婦人職業輔導館」(『教海一瀾』第688号17頁、1923年10月30日)。同館については、『教海一瀾』や『婦人』は「輔導館」、『中外日報』は「轉導館」、前掲『九條武子—その生涯とあしあと—』には「補導館」、『真宗人名辞典』には「指導館」と表記されている。
- 47 本願寺築地別院編『築地別院史』294頁(本願寺築地別院、1937年)には1923年10月31日～11月20日の間でのべ2,343人、一日平均83人が利用したとする集計があるが、翌年7月に『中外日報』(「震災後の築地と浅草(五)両本願寺の現勢」1924年9月12日付)が報じた「築地本願寺社会事業統計」では補導館の項目が無くなっている。
- 48 武子は、「現在の私は多くの方々から大騒ぎをされてゐるが、自分は社会的になんにもしてゐない。只だ騒がれてゐるに過ぎない。それでは佛祖に対しても、また信徒や多くの方々に対して申訳がない。武子も何か一つは仕事をしたいと思ふ。」と田中に協力の要請をした。田中もと子「わが世に咲き匂ふ無憂樹の花—社会事業家としての九條武子夫人—」(『婦人世界』24巻3号66頁、1929年)。
- 49 診療所は当時、「一日平均百二十餘名の患者を診療している発展ぶり」と報じられ(「本所診療所猿江に移転」1926年10月3日付『読売新聞』)、武子の没後、あそか病院(財団法人あそか会)として結実した。現在は社会福祉法人となり、地域に根差した医療・介護を行っている。
- 50 仁本正恵「九條武子夫人の御入院されるまで」(『大乘』第13巻第2号74～75頁、1934年2月)。
- 51 1924年12月15日付書簡「社会奉仕のために」(前掲『九條武子夫人書簡集』148～149頁)。
- 52 「九條武子夫人を偲ぶ座談会」(『大乘』第18巻第2号57頁、1939年)。
- 53 年末無料巡回診療は、1925(大正14)年12月28～30日、1926年12月18～27日、1927年12月17～28日

の三度実施され、「受付時刻六時すぎまで受療者山の如く医員一同は夜に入るまで大活動」(1926年12月19日付『読売新聞』)等と報道された。救療者は延べ6万5,080人にのぼった。仁本正恵「九條武子夫人の歩まれた道」(『婦人』第30巻3月号33頁、1934年)。

- 54 堀井源之助「九條武子夫人と三河島貧民窟」(『現代仏教』第5巻3号90頁、1928年)。
- 55 九條武子講演速記、1927年11月於神戸鐘紡工場。(『追慕抄』117頁、仏教婦人会連合本部、1940年)。
- 56 仁本正恵「障碍せられざる強さ」(前掲『追慕抄』86頁)。大経には「諸の庶類の為に不請の友となり」、維摩経仏国品には「衆生請わざるに友となって之を安ず」とある。
- 57 「細民部落にをける本願寺派の活躍 東京では一番根強い」(1927年1月5日付『中外日報』)。三河島で行われていた本願寺の隣保事業の一つ「仁風会館」にて実施された。
- 58 前掲「九條武子夫人の御入院されるまで」。
- 59 本多恵隆「九條武子夫人を偲びて」(前掲『残照』74頁)。

(さかぐち きみこ：2009年度大学院修了)